第80回麻布獣医学会　一般講演8

膀胱鏡検査により診断した犬の慢性リンパ球性膀胱炎

石川　勝行，杉山　　淳，村井　裕美

石川動物病院

雌犬の膀胱炎は尿路結石や発情時の細菌感染などにより起きるが，時に原因が特定できない膀胱炎もある。抗生物質と非ステロイド消炎剤の投与で治癒できなかった8歳の雌犬の血尿を主症状とする膀胱炎に，膀胱鏡検査を行って膀胱粘膜の詳細な観察と粘膜生検を行った。病理組織検査における慢性リンパ球性膀胱炎という診断を元に治療を行ったところ，速やかに症状が消失したので報告する。

【症　例】8歳，雌，パグ，3～4日前からの血尿を主訴にて来院。アモキシシリン12 mg/kgとカルプロフェン5 mg/kgの投与を1週間行った。症状の改善を認めず，再度オフロキサシン5 mg/kgとカルプロフェンの投与を1週間行ったが完全に改善することはなかった。

【一般臨床検査】身体検査では異常なく，尿検査・レントゲン検査でも異常は認めなかった。また，血液検査では白血球数の軽度上昇と軽度の貧血傾向が認められた。膀胱の超音波検査では，血餅と粘膜の肥厚・炎症像が認められた。

以上の検査結果より血尿の原因を特定することができず，難治性膀胱炎と仮診断して膀胱鏡検査を行うこととした。

【膀胱鏡検査】検査に用いた膀胱鏡はカール・ストルツ社製，外径2.3 mmの硬性鏡に，生検鉗子用チャンネルと注水用チャンネルを装備したシースを装着して，生理食塩水を注入しながら外陰部尿道口よりこれを挿入して検査を行った。膀胱粘膜は充血し，膀胱腹側の粘膜に1～2 mmのドーム状の小隆起を多数確認した。バイオプシー鉗子にてこの隆起部を3ヶ所採取して病理組織検査に供した。

【病理組織検査】膀胱粘膜上皮はやや肥厚し，粘膜下織ではびまん性にリンパ球を主体とした炎症細胞浸潤が認められ，一部でリンパ濾胞の形成を伴っていた。濾胞形成を伴う慢性リンパ球性膀胱炎と診断した。

病理検査結果を受けて，プレドニゾロン1 mg/kgとエンロフロキサシン5 mg/kgの投与を行ったところ，症例の血尿は完全に消失し，以後良好に経過している。

【考　察】これまで膀胱の粘膜面の変化に関する診断方法としては，レントゲン検査，超音波検査が一般的であり，特殊検査としてCT検査等が挙げられる。今回，血尿の原因診断として膀胱鏡検査を行ったが，これにより膀胱粘膜の変化を詳細に観察することができ，さらに粘膜生検による病理組織学的診断を低侵襲下で行うことができ，日常の臨床で非常に有用と思われた。